

MISTY TRIP

夏になると怪談が流行るなんて事があります。先夜もここミルクホールで閉店後皆で食事をしたあと始まりまして、こんな古い造りで、もともと昼間だって薄暗いんですからやはりちょっと不気味です。おぼけなんて、もとは人間だなんて思ってみても怖いなんて理屈じゃありません。だいたいにして、怪談なんて言いだしっぺが一番恐がりなんです。その日もやろうやろうって言ってた兆本人がキャアキャア言って寝てきましたから世話ありません。

ある夏の事。そんなおっちょこちょいな四人がお盆休みに、レンタカーを借りて神戸に旅行に出掛けました。さて夜になったのでかの有名なかねてより楽しみにしていた『六甲山夜景ツアー』へと繰り出しました。四人を乗せた車は三の宮から六甲山へと旅の期待と興奮を乗せて登っていきます山は一台の車など簡単に吸い込んでしまうように、暗い口をぽっかりと開けているのです。知らぬは四人ばかりなり。「へえ、こいつはすげえや」「全くだ、夜景がでっけえや」「それにしても、気味の悪い風だねえ。なまあったけえや」「そうだな、そろそろ帰るとするか」胆玉の小さな四人は、人っこひとりない山中がだんだん怖くなってきました。

それもそのはずこの辺りはその方では有名な名所なのです。鈍感な四人もようやく妙な空気を感ぜ始めました。互いに怖さ隠して車中飲めや眠えやの大騒ぎを始めましたから運転手はたまりません。そうしているうちに、運転手の首筋に冷たい女の濡れた手がすーっと伸びてきた「ギャー！」と言いながら車を止める「ななな、なんだってんだよ！こんな所で車を止めやがってえ」「海はあー広いな、大きいなあー」もう怖さ忘れたさに大声で唄いはじめましたから、他の三人は何が何だかさっぱり訳がわかりません。とにかく、思い着く限り、大声で唄いながら六甲の坂落しをブンブン飛ばしながら下っていくのです。それにしても、もう怖さ忘れたさにかたがた出てくるのは童謡で決まってるもんですそれまで後ろの座席では、大変な宴会の最中でしたからたまりません。酒はひっかふるし、頭はぶつける、やっとな体を整えて顔を上げると、殆ど真逆さまに降りていくのが見える。いったいぜんたい、とんでもない事になったものです。

そうのごうのしてやっとなとまでたどりつきました。余りの怖さに皆汗や汗でビショリ濡れています。ところがもともとおっちょこちょいの四人の事です。余りの怖さにいったい何がどうして怖かったのか、まるっきり覚えていません。まだまだ足はガクガク手はブルブル震えているのですが忘れてしまった強みです「六甲山なんて、でえしたもんじゃねえな」「まったくだ、はるばる訪ねて来てやっとなってえに」「うん、まったくだ、でもやっぱ酒は明るくて平らな所で飲むに限りゃしねえか？」「うん、そうさうだ」「うん、そろちやけえねえ」でな訳で四人は、ありったけの元気で飲み直し、翌朝には本当にすっかり何もかも忘れてしまい、又四人楽しく旅を続けました。・・・とさ



Milk Hall Times 11th

FELLOW!

通称永ちゃんこと田口永吉君は、私の友人で大そうな田舎者です。永ちゃん不幸は生まれてから小学校の高学年までを東京の山手で過ごしながら、その後の思春期を東北の人口十万にも満たない小さな町で送らねばならなかった事にあります。彼は自分の事を立派な東京人だと思っていますが、そう思っているのは永ちゃんだけです。その点、子供の頃は地方にいたくせに、中学の途中から東京にそれも赤坂に住み着いて、その後鎌倉に越していった由美子などはいっばしのシティーギャル風の顔をしています。永ちゃんは、よく見ると透けるように白い肌、栗毛色の髪と大そうなハンサムで露白亜人とのハーフだと言っても信じてしまうようなルックスの持主ですが、どちらかというとポリシヨイバレエ団よりは、コルボーズの青年労働者を思い浮かべてしまうようなそんな感じなのです。彼はいつも人目を気にし、どんな時でもポーズをとる事を忘れませんし、ファッションについても「俺は人真似なんかしない」とか言っていますが、彼がしている事と言ったら、せいぜいシャツの襟を立てて肩をいかにして歩く事ぐらいで、だいいち、役者を目指して行くくせに「ヨボヨボのじじいの役が来たらどうしよう」なんて言っているのを見るとただのミーハーみたいです。

そんな田舎者の永ちゃんですが私はどうも彼を嫌になる事ができません。先日、福引きで当たったどうしようもなくダサイ手さげバッグをあげたら大そう喜んで、次の日からさっそく持って来ました。それまで彼は、よく東京見物のおじさんが持つようなジャガード織りのボストンバッグをチャックが壊れたまま使っていたのです。新しいバッグの調子を聞いたら「うん、とてもいいよ。だいいち、こうやって使えるんだ。」と喋ってそのバッグを二つ折りして小脇にかかえて見せてくれました。私が彼のセンスに驚いたのも無理もない事です。もっと驚きだったのは、その時の一切ポーズなしの無造作な笑い顔でした。

つねづね私は、永ちゃんその無造作さを売り物にしたら、あのルックスですら絶対にモテる事うけあいだと思っているのですが、その事を本人に教えてあげるつもりは有りません。今度私は、清水の舞台から飛び降りるつもりで彼と六木木のディスコに行きます。永ちゃんは、「ファッションは、アダルトに決めようぜ」と言っていました。

COLUMN



トイレ歯形事件

期末試験の最終日、私達仲良し4人組はもうすっかり夏休み気分です。古ぼけた中学には似つかわしくなく壁もドアも便器も全てピンク色という私達4人のお気に入りのトイレの中で東の間の放課時間を愉んでいた。すると突然1人が「じゅんて、スキップが速いのよね！」と言いだした。じゅんは、そうよスキップならだれも勝てないわよ。としきりと自慢し始める。そんな事解らないんじゃない、私だって幼稚園の頃から負けた事なんかなかったわよ。そういうえ私達真面目に競争して競争した事なんかないじゃない。そうよ、やってみなくちゃ解らないわよ。というような事になってしまった。ピンクのおしゃれなトイレはやたら広くて、洗面所とトイレの間の通路は十分に長い私達4人はその端に並び、ピンクの壁に向かってダッシュする事になった。私もドン！で思いきりダッシュしたけれどいくとトイレの通路が長いとはいえあつという間に壁は目前に迫った。ヤバイと思ってスピードをゆるめるやいなや隣でものすごい音と共にピンクの壁に突進したじゅんがみえた。ほかの2人も壁を目前にしてダッシュをやめたらしいが、じゅんだけはそのままダッシュして壁に体当たりしたのだ。私達3人はあまりの凄惨な音にあってとられて見守った。じゅんは顔面をおおってこっちを見ない。大丈夫？とロクに声を掛けると「どうしよう、前歯は保険がきかないの」と言って振り向いたじゅんの唇から前歯がぼろぼろとこぼれた。そしてよくみるとピンクの壁には、くっきりとじゅんの歯形が残っていた。そしてその歯間も思いきり授業に遅れた私達4人だったが、その話には涙して怒れなかった。そして今もその歯形が残っている。

DARTS

MILK HALL DARTS TOURNAMENT

1987. SUMMER

1987.8.3 (MON) PM 7:00 ~ AT MILK HALL.

¥1500(ONE DRINK・SNACKS)

素敵な賞品・賞状などが有ります。1勝するごとにドリンク券、負けても敗者復活戦などその他色々な企画を予定しています。

暑い夏です。近頃ダーツが、突然ブームになり始め私達もビックリしています。この調子でどんどん人気が出て国技にまでなったら、楽しいでしょうね。まあそれほどには絶対ならないだろうけど、ダーツは楽しいですよ。ハンディ戦ですから、皆チャンスが有ります。初心者の方もルールを知らない方も歓迎します。お申込みは、カウンターまで

